

愛媛の生物多様性

○生物多様性とは

地球上の生きものは長い時間をかけて様々な環境に適応して進化し、未知のものも含めると3,000万種ともいわれる多様な生きものが生まれました。これらの数え切れない生命は、一つひとつに個性があり、それぞれが網の目のように様々な関係でつながって、私たちが現在生活している地球の環境を支えています。こうした、「個性」と「つながり」を生物多様性といいます。

生物多様性条約でも、生物多様性をすべての生きものの中に違いがあることと定義し、「生態系の多様性」「種間（種）の多様性」「種内（遺伝子）の多様性」という三つのレベルがあるとしています。

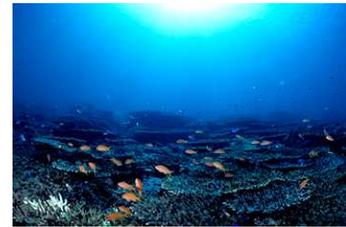
①生態系の多様性

干潟、森林、湿原、河川などいろいろなタイプの自然があることです。

例えば、県内には、

- ・ハクセンシオマネキなど多くの水生生物が生息し、シギ、チドリ類など渡り鳥の渡来地となっている加茂川河口の干潟
- ・ブナ林やイワカガミなどの高山性植物が生育しタカネリクワガタなど希少な昆虫類が生息する石鎚山系
- ・エンタクミドリイシやソフトコーラルなど宇和海のサンゴの群落

など、いろいろなタイプの自然環境が、多様な生態系を構成し、種の多様性の源となっています。



②種の多様性

色々な生きものの種が生息・生育しているという状況のことをいいます。ヒトやイヌ、ネコなども種の一つで、本県では18,739種の野生生物が確認され、未確認のものも含めるとそれ以上の種が生息・生育しているといわれています。そのうちの種がひとつ欠けても、生態系全体のバランスに影響するおそれがあります。



本県で絶滅が危惧されている代表的な種としては、県獣のニホンカワウソ、カブトガニ、ハッチョウトンボ、サギソウ、エヒメアヤメなどがあります。

③遺伝子の多様性

同じ種でも、遺伝子の違いによって形や性質・行動などの特徴が少しずつ違うことがあります。例えば、アサリの貝の多様な模様や同じゲンジボタルでも西日本と東日本では発光の周期が異なることが知られています。同じ種内にも多様性を持つことで、種が環境の変化に対応して生き残っていくことが可能になります。



本県の代表的な農産物の温州みかんにも、10月に収穫できる極早生から年明けの晩生、甘いものや酸っぱいものなどいろいろな品種があります。



生物多様性のめぐみ(生態系サービス)

私たちは毎日、植物などが作り出す酸素によって呼吸し、農作物を食べ、絹や木綿などの繊維からなる衣類を身につけ、そして木材を使った家で暮らしていますが、この当たり前のような営みは、生態系サービスなくしては成り立ちません。

大気と水

植物などが光合成をすることで、酸素が生み出されています。森林は、水を保ち、循環させ、いのちを育てています。



食べものや木材

私たちが毎日食べているご飯、野菜、魚、肉や生活している家の木材など暮らしに必要な不可欠なものは、水田、森林、海などから農林水産業を通じてもたらされるものです。



県開発の甘とろ豚



生きものの機能や形状の利用

多様な生物は、生き物の機能や形態をまねた技術開発への応用、将来の農作物の品種改良など、間接的・潜在的な利用の可能性があり、私たちの豊かな暮らしにつながる有用な価値を持っています。



カワセミのくちばしの形状をまねて開発された新幹線

豊かな文化の根源

私たちは、自然を尊重し、自然に接することで、豊かな感性や美意識を培い、自然と結び付いた様々な文化を生み出してきました。多様な生態系は、地域色豊かな食、工芸、祭りなど地域固有の財産ともいべき文化の根源となっています。



鯛めし(東中予)



宇和島牛鬼まつり

自然に守られる私たちの暮らし

豊かな森林や河川は、災害防止の機能を持ち、また、安全な飲み水を供給するなど、私たちの暮らしを守る基盤となっています。



面河溪谷



西条のうちぬき

○生物多様性の危機

- ★第1の危機 人間活動や開発による破壊、種の減少
- ★第2の危機 耕作放棄など人間の働きかけの減少による影響
- ★第3の危機 外来生物などによる生態系のかく乱
- ★第4の危機 地球温暖化による危機